

いのちって何？

(原文は英語)

サイシャ・マヤ・タッポウ (12 歳)
フィジー
インターナショナルスクール・スバ

命は贈り物、命は経験、命は可能性です。

命は贈り物であり、神からの恵みです。なぜなら命は、誰かの役に立ち、世の中のために良いことをするチャンスを私に与えてくれるからです。命は経験です。なぜなら命は、私たちが成長し、素晴らしいことを行い、この世界の本当の姿を知るための場を与えてくれるからです。そして命は、私の中に、そして、この世界に秘められたものを発見する可能性を与えてくれます。

私はまだ 12 歳ですが、命を無駄にしてはいけなことはわかっています。私には生きている間に実現したい夢があります。誰かの役に立つこと、環境を守ること、私の中の真の神性を大切にすること、そして、正しいことのために立ち上がることです。

2019 年、自分の人生が一変する出来事を経験しました。私がいた病院には、私よりも年下の子どもたちが何人か入院していました。皆、心臓に穴が開く先天性の病気を持つ子どもたちです。生き延びるためには、手術を受ける必要があります。医療の介入がなければ、その子たちは死んでしまいます。しかし、この地域には手術のできる専門医がいないので、子どもたちもその家族も希望を失っていました。高額な治療を受けるために海外へ行く経済的余裕もありません。ところが、サイ・ブレーマ財団という非営利組織が無償で手術をしてくれる専門医を手配してくれたおかげで、子どもたちの命が救われました。彼らは、新しい命の贈り物を授かったのです。

その子たちの様子をそばで見ると、私の人生を一変させる経験ですが、その子たちの両親にしてみれば、それはまさに命の贈り物であったことに私は気づかされました。

私たちは、ふだんからあらゆることを当たり前のように捉えています。水、食べ物、着る物、教育、医療、住まいがあるということは、非常に恵まれたことです。健康な体で幸せに生きられるということは、とてもありがたいことなのです。

良いことであっても悪いことであっても、ささいなことに惑わされてはいけません。命は無駄にしてはいけなのです。

新型コロナウイルス感染症を通じて世界は多くのことを学びました。つい最近まで私たちは、やりたいことがすぐにできる生活をしていましたが、そんなぜいたくな暮らしのほとんどが今は奪われてしまいました。

私たちは、感染症を通じて命の贈り物の大切さを学びました。個人も社会も国も、あるいは世界も、自分たちのことだけを考えるべきではないことも学びました。地球上の人間は皆互いに結ばれていて、世界全体が一つにならなければいけません。大切なのは、愛情、思いやり、感謝する心です。感謝する姿勢があれば、前向きな力が広がり、世界中で生命をいきいきと生かす動きに弾みがつくのではないのでしょうか。

こうしたことは口先だけであってはいけないことに私は気づきました。ならば、そうした前向きな力を世界に広げていくために、私はどうすればよいのでしょうか。それは、私なりのやり方で恩返しすることだと思います。一人の人間がすべてを実行することはできませんが、誰でも何か一つは実行することができます。私なら、病気の子どもたちを助けたい。心臓病が子どもたちに与えた苦しみや、特にその両親に与えた精神的痛みを目の当たりにした私は、貧しい子どもたちの苦しみを和らげるために、医師になり、小児循環器の専門医になりたいと思っています。これと同時に、子どもと動物の権利の改善にも取り組んでいきたいと思っています。

私は、何かを証明するには、ただそれを夢見たり口にしたりするのではなく、行動で示すことを両親から教わりました。

4年前、私は母にならってベジタリアンになろうと決意しました。すべての人間と生き物に、生きて呼吸をし、幸せになるチャンスが与えられるべきだと思うからです。私たち人間のニーズと欲求を満たすために、素晴らしい動物たちの命を奪うことはしたくありません。人間にも環境にも優しく、持続可能な植物由来の代替食品が数多くあるのですから。

誰もが一体感、思いやり、感謝の心を持つようになれば、この世から戦争がなくなり、世界は平和で満たされるでしょう。世界は存続し、生命を大切にようになるでしょう。こうした変化の風が吹き始めれば、生命をいきいきと生かす動きが自然と広がっていくのではないのでしょうか。

命は贈り物、命は経験、命は可能性なのです。